

リハビリ看護試論 生の意味を問う

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
村井 みや子

日本は世界一の長寿国となり、高齢化に伴う慢性疾患や事故等によって何らかの障害を負ったり、その障害に関連した精神的な葛藤や苦悩を抱えたりしながら、生活している者が増えている。中途障害を抱えたことで、患者たちはリハビリテーション（以下、リハビリ）のために入院し、今までの自己でない自分と向き合いながら訓練に励み、障害を抱えた《生》を生きなおすに直面することになる。リハビリをして訓練に励み自立していく人、大きな苦悩を抱えながら訓練する人、あるいは《生》を問いながら訓練している人、そういった患者に出会うなかで、そもそもリハビリ看護とは何かをあらためて考えさせられた。

本論文は、私自身がリハビリ看護実践において出会った中途障害者の事例を通して、我々人間の生きることやその意味、ケアする者とケアされる者との関係のあり方を問いなおしたものである。

本稿では私自身がたどってきた約 40 余年にわたるリハビリ看護の歴史とそのあり方を、私に関わった中年主婦、中年男性、高齢婦人、中年男性の 4 人の障害を抱えた患者との経験をもとに、リハビリ看護について検討した。

リハビリ看護は、患者が生活を再構築できるように、生活の訓練や心の鍛錬に関わり援助していくことにある。そして、必死に訓練している、苦悩を抱えた患者に寄り添うことである。リハビリは人権の復活、そして心の立ち直りとも言われているが、患者の立ち直りには何よりも家族の存在が大きい。生きる力を引き出し精神的な支えとなるのが家族の存在なのであるが、しかもそこには患者とともに家族の生きなおしも求められる。こうした患者をケアする者とケアされる患者との間には、互いに癒され助けられる相互関係が成り立っていた。その関係の中で、時に患者から《生》の根源に関わる言葉を訴えかけられることもあり、それを通して看護師自身もまた、いかに生きるべきかが問われていた。私は、こうしたいろいろな生老病死の出会いから、“死は苦しみから解かれる”という気持ちになり、仏像の前で無心に祈るようになった。祈りは、もう一度自分を取り戻す試みでもある。新しい《生》を実感できるために。